

農林学系

教員数	教員等数 (人)	教授 15 (15)	助教授 16 (18)	講師 11 (12)	助手 4 (5)	技官〔準研〕 5 (5)		
	異動状況 (人)	退職・転出 2 (-)	昇任 2 (3)	採用 1 (1)	学内 -			
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数				
		国内	国外	国内	国外			
	60 (73)		45 (29)		94 (103)		25 (30)	
	受賞数	3 (2件)						
	研究費等	採択件数		採択率(%)		金額(千円)		
		科学研究費		15 (15)		36 (37)		55,600(43,300)
		学内プロ		14 (14)		33 (33)		7,363(9,514)
奨学寄附金件数・金額		8件		6,108千円		(8件 3,589千円)		
受託研究件数・金額		7件		23,492千円		(8件 30,277千円)		
受託研究員		1人 (人)						
施設・設備								

・()は前年度の数値を示す。

1 農林学系の活動

農林学系の研究内容は、食料・農業に関する理論的・実践的研究にとどまらず、生物資源の利活用によるエネルギー開発や環境修復などの学際領域に及んでいる。こうした研究動向の変化を反映し、平成14年度も農学・林学・農業経済学の各分野で、特色ある多様な研究が展開された。

- (1) 研究成果：論文発表件数は、総数では昨年度とほぼ同様であったが、国際誌への掲載論文数が増加した。また、学会賞2件、「明日への環境賞」(朝日新聞社)1件の受賞があり、全体として本学系の研究活動は高い評価を受けた。
- (2) 研究費の獲得：科学研究費については、採択件数および採択率はほぼ昨年度と同様であったが、獲得金額は増加した。その他の外部資金については、多少の変動はあるものの、全体として昨年度並みの実績を維持し、農林水産関連分野を中心に活発な産官学共同研究が展開された。また、教員1名が生命環境科学研究科生物機能科学専攻を中心とする21世紀COEプログラム(生命科学分野)の主要メンバーとして参画し、研究費の重点配分を受けた。
- (3) 国際交流：バイオシステム研究科等の関連組織と共同して、新たに中国吉林大学と部局間交流協定を締結した。また、科学研究費による海外共同研究の実施、国際交流計画事業費による外国人研究者の招へい等を通じて、本年度も研究および教育の両面で活発な国際交流が推進された。
- (4) 社会貢献：多数の教員が関連学会の役員をはじめ、政府、地方自治体および団体の各種審議会委員、評価委員および推進委員等を務めた。

2 自己評価と課題

過去5年間の論文発表数および外部資金の獲得額は、徐々にではあるが増加している。これは、研究専念期間取得制度の導入など、学系独自の取り組みが一定の成果をあげていることを示しているが、主要な外部資金である科学研究費の取得が必ずしも伸びているとはいえず、なお一層の努力が求められる。また、平成14年度に新たに設けられた農林水産研究高度化事業(公募)の採択率も低く、社会的要請に対する本学系の貢献は十分とはいえない。研究対象の多様化と総合化に柔軟に対応するためには、農学・林学・農業経済学で構成される本学系の研究分野構成について再検討し、個別専門領域の特色ある研究をさらに継続・発展させるとともに、食料・農業・環境分野の重要課題に総合的に取り組むことが可能となるような研究体制を構築する必要がある。

3 その他特記事項

総合研究棟Aの完成により、社会人リフレッシュ教育に係る増員分の研究室が確保され、慢性的な研究スペース不足に対して一定の改善がみられた。また、これを機会に学系棟の有効利用を促進するため、学系として実験室、教官室および院生室等の再配置を行った。